

ユニバーサルデザインを目指す

プラネタリウム番組の制作

尾関さやか(山梨県立科学館)

山梨県立科学館では、2014年3月から投影予定のキッズプラネタリウム番組の制作を進めています。この番組は、ボランティアグループ「星の語り部」制作の番組「ねえ おそらのあれ なあに？」を元に、ユニバーサルデザインの番組を目指しています。制作は、まだ始まったばかりですが、ユニバーサルデザイン天文教育に関わる皆さまからの貴重なご意見やご助言をいただきたいと考え、この度、発表させていただくことにしました。

1. 山梨県立科学館におけるキッズ番組の位置づけ

現在制作中の番組は、未就学児から小学校低学年対象のキッズプラネタリウムです。2014年3月から投影開始予定です。山梨県立科学館では、土曜日、日曜日、祝日と、長期休暇は、1日5回(5種類)の投影を行っており、今回の番組は、その1回目の投影となります。時間は、10時30分～11時15分で、星空解説の後20分間が番組となります。

2. なぜ、ユニバーサルデザインを目指すのか？

山梨県立科学館のプラネタリウムには、ボランティアグループ星の語り部[1]があります。語り部には、視覚障害者や知的障害者も参加しており、プラネタリウムに、たびたび来場してくださっています。学校団体での来場もありますが、この方々以外で、障害者が普段、家族や友人と訪れることはほとんどありません。科学館でも、障害のある方々を受け入れる準備が充実しているかという点、まだまだできることがあるのではないかと状況です。

そこで、これまでよりも、障害のある方々に、もっと気軽に来場してほしいと考え、今回のような番組作りを目指すことにしました。また、障害を持っていない方々にも、この番組を通して、新しい楽しみを発見していただいたり、「いろいろな人がいて当たり前」と感じてもらえるようにしたいと考えています。

3. 番組制作の背景

この番組制作のはじまりは、ユニバーサルデザイン絵本「ねえ おそらのあれ なあに？」[2]です。この絵本の特徴は、見ても触っても楽しい点字と凸凹の絵本です。この絵本は、「街と里と山で、星の見える数は違うけれど、みんな同じ星空を見ている」、「星はいつも私たちの上にあって、みんなをつないでいる」ことを伝える内容となっています。

星の語り部が制作したこの絵本は、さらに夏休みの夕方投影するプラネタリウム番組「夕涼み投影 ねえ おそらのあれ なあに？」になりました。これも星の語り部制作です。この番組を元に、今回の番組を制作することとなりました。

4. 番組の概要

番組の仮タイトルは、原作と同様「ねえ おそらのあれ なあに？」です。

オールシーズン対応で、物語形式とします。

出演は、女の子、子ぎつね、子ぐま。そして、木のおじいさんと、女の子のお母さんです。

テーマは、原作同様、「星はいつも私たちの上にあり、みんなをつないでいる」ことです。

コンセプトは、次の 3 つです。(1)観客の想像力をかきたて、心豊かになる番組を目指す。(2)星空の現状(光害)を知り、考え、行動へとつながることを目指す。(3)ユニバーサルデザインの精神を大切にする、ということです。

物語の流れは、基本的には絵本をもとにした夕涼み投影のストーリーです。絵本では、出演者たちが、それぞれの場所で星を見ていましたが、夕涼み投影からは、女の子、子ぎつね、子ぐまは出会い、それぞれの住む場所の星の数の違いを知ります。そして、木のおじいさんと出会い、「星の数がなぜ違うのか」、「自分たちがいるところは、どんなところなのか」、「星の存在とは自分たちにとってどんなものなのか」、お話ししながら気づいていきます。

より、子どもにもイメージしやすいように、「星がずっと前からある」ということを、地球の歴史を大まかにさかのぼって見せたり、「自分たちの暮らす地球がどんなところにあるのか」ということを、地球の外側から見る映像を加えてはどうかと考えています。そして、子ぎつねは耳が聞こえない子、子ぐまは目が見えない子に変更しました。それは聞こえたり、見えたりする人々には、「いろんな人がいて当たり前」と感じてほしい、聞こえない見えない人々には、番組を身近に感じてもらいたいという思いから、今回このように設定しました。

5. 検討すべき点について

この番組制作にあたって、検討が必要なところは、次のことであると考えています。

まず、出演者たち皆で会話する方法です。視覚障害者と聴覚障害者と健常者 3 人がどのように会話するのが適しているのかということ、それとともに、この会話をしている様子をプラネタリウムの観客にもわかりやすく、違和感なくドームで見ってもらう方法です。

さらに、物語全体を通して、さまざまな方にわかりやすく、かつ楽しめるものになりたいと思います。副音声をつけ、字幕もつけてはどうかと考えています。ただ、字幕については、当館のドームは傾斜しており、360度の映像の下の方に字幕があると、見つらなくなってしまう可能性があります。どのような方にとっても見やすく、違和感なく楽しく観覧していただける方法があったらと思っています。

そして、番組をご覧になる方で希望される方には、原作の UD 絵本の貸し出しを考えています。番組のはじめに、お母さんが絵本を読み聞かせるシーンがあるので、絵本を触りながら見ていただけたらと考えていますが、他にも、有効な配布物があるかについて検討しています。

そして、来場した子どもたちには、ちょっとしたおみやげを渡す予定です。私としては、物語に出てくる「場所による明るさの違い」がわかるような物で、視覚障害の子も楽しめるものが良いと考えています。

6. まとめ

この度のユニバーサルデザイン天文教育研究会では、「会話の難しさをそのまま表した方が自然である」というご意見や、「障害者の家族や近い人への配慮もしてほしい」というご意見など、発表前には気づ

かななかった貴重なご意見の数々をいただくことができました。

今後は、いただいたご意見をふまえつつ、上記の検討事項を熟考しながら制作していきます。ご覧になられた方にとって、自然で、「見てよかった」、「面白かった」、とっていただける番組ができるように取り組んでいきます。

参考文献

[1]星の語り部ウェブサイト <http://hoshinokataribe.main.jp/new/>

尾関さやか 「ミュージアム・エドゥケーターとその実践―「星の語り部」プラネタリウム活動を通じて―」
環境思想・教育研究,2008,第2号

[2]星の語り部 『ユニバーサルデザイン絵本16 ねえ おそらのあれ なあに?』 NPO 法人ユニバーサルデザイン絵本センター

NPO 法人ユニバーサルデザイン絵本センターウェブサイト <http://www.ud-ehon.net/>